

兒玉村をかざりとせり、此内東西縦横の坊巷、甲乙大小の道路連綿として、神社寺院たち交り、士農工商の家々軒をならべ、薨をつらねたる、その敷いくばくといふことをしらす、御城の西十町ばかりに名古屋村あり、是此地の舊邑にして、上にはゆる四至の廣き大名となれる本所なり、さてこの名古屋といふ地名は、何ごろより呼そめしにか定かならねども、大須眞福寺の藏書のうち、貞治三年にかけるものに、尾張國那古野莊安養寺今の天坊と記したるをはじめにて、應安六年、應永十一年など書るものに、並那古野とあり、熱田宮神寶の刀の彫文字、大永二年八月云々とあるには、今の如く名古屋とかけり、名古屋と書事は、寛永已後の定り也、凡て那古野、名古屋など三字にかくは、假名書なれば、いづれにてもあるべく、さまざま心々にものしたるも、古風の存れるならはし也、

〔尾張志〕熱田。

往古は郷名村名にてもなく、たゞ神宮御名よりうつりて里の名ともなりしなり、其故は日本書紀神代卷の八岐大蛇退治の條の一書に、其蛇飲酒而睡、素盞烏尊拔劔斬之、至斬尾時、劔刃少缺、割而視之、則劔在尾中、是號草薙劔、今在尾張國吾湯市村、卽熱田祝部所掌之神是也とあるし、かくあゆち村といひ、熱田の祝部とあるにて知るべし、こゝぞ郡中の本處にて、廣く吾湯市村といひしを、成務天皇の御時、諸國の郡縣を定給ひしかば、村名を郡名におよぼして、愛智郡とはなりし也、舊事紀古事記、六國史をはじめ、普く古書にみな熱田とかけるゆゑよしは、寛平二年十月十五日書る尾張守藤原村朝臣が熱田縁起に、宮簀媛命のはからひにて、社の地を占ひ、草薙の神劔を遷し奉らむと衆議ありて、その社の地を定られしに、其處に楓樹一株ありしが、自然に炎焼して、その樹水田の中へ倒れ入、光焰不銷して、其田あつかりければ、熱田と名づけしよし記したるに、よれり、この説御鎮座の舊地を考ふるに、少したがへるふしあれど、尾張風土記の古説なればい